

## 教員活動状況報告書

提出日：令和 4 年 3 月 16 日

所 属：生命・環境科学部 教職課程

氏 名： 小玉 敏也 職位： 教授

役 職： 教職課程主任

### I ティーチング・ポートフォリオ

#### 1. 教育の責任（教育活動の範囲）

担当する教育活動は、全学科の学生を対象とした教職課程及び環境教育を専攻する学科の学生と大学院の学生を対象とする。前者については、教員免許を取得する学生と教員を志望する学生の教職に関する基本的な教養と資質・能力を育成することに責任を負い、後者については環境教育の現場で生きがいを持って働く社会人の養成に責任を負っている。（令和 3 年度実績）

科目名	学科・専攻	必, 選, 自	配当年次	受講者数
教育職概論	教職課程	必	1	48
教育法概論	教職課程	必	1	48
特別活動論	教職課程	必	3	17
総合的な学習の時間の指導法	教職課程	必	3	18
教職実践演習	教職課程	必	4	24
教育実習指導 I・II	教職課程	必	4	24
卒論論文	環境科学科	選	3・4	4
卒業論文	動物応用科学科	必	3	1
科学技術英語	環境科学科	選	3	2
科学の伝達	動物応用科学科	選	3	1
環境教育特論	環境保健学研究科	選	M1	10
科学者・研究者論	環境保健学研究科	選	M1	18
環境教育学特別実験	環境保健学研究科	必	M1・2	2
環境教育学特別演習	環境保健学研究科	必	M1・2	2

#### 2. 教育の理念（育てたい学生像, あり方, 信念）

教育の理念は、環境マインドを持った教育人財を育成することにある。本学での授業を基盤として、在学中から一般社会に積極的に関与させ、論理的/批判的な思考力、体験活動を通じた実践力、現場往還型の研究能力を身に付けさせたい。

その能力を育成するために、教職課程では教育実習を通じた主体的・対話的な授業への取組

み、研究室ではボランティアや実習を通じた実践的な授業と事例研究に取り組む。また、これらの取組みを通じて、社会人に必要な基本的な礼儀や態度等も教える。

### 3. 教育の方法（理念を実現するための考え方，方法）

#### (1)教職課程授業での教育方法

4 学年で約 120 名の学生を対象としている。4 年次の教育実習を目標として、教員としての専門的能力（教科指導力・教育技術等）と社会人基礎力（対人関係能力・コミュニケーション能力等）を同時に育てることから、異質集団によるグループワーク、対話と合意形成の能力、人の心を読み取る力、表現能力等を育成する教育方法を活用してきた。

#### (2)研究室での教育方法

学内での講義・演習と学外での体験実習・ボランティアを組み合わせた教育方法を活用してきた。講義・演習では正確に論文を読解できる能力と、適切な日本語で表現できる言語能力を育てる。そこで身につけた能力を、実習の現場で考え、生かし、体験しながら更に鍛えてきた。この2種の教育活動を往還的に経験させながら、質的に高めるスパイラルな教育方法を活用してきた。

#### アクティブラーニングについての取組

- ① 授業中のグループワーク、ディスカッション、模擬授業。
- ② 授業時における学習指導案づくりと発表。
- ③ 卒論制作過程での協力事業者・団体でのボランティア及び学外実習。

#### ICT の教育への活用

- ① Google meet を活用したブレイクアウト・セッション
- ② Power Point を活用したプレゼンテーション
- ③ 学理を活用した資料保管、課題提出、試験のフィードバック

### 4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）

#### ①教育（授業，実習）の創意工夫（A）

・ Google meet でオンライン授業を実施してきた。教員の講義だけでなく、映像の視聴、学生同士のディスカッション、レポートの作成など、多彩な方法を組み込んで授業を行なった。

・ハイブリッド授業では、教室内と学外の生徒がコミュニケーションをとりながら授業ができる方法を進めてきた。

#### ②学生の理解度の把握（A）

・毎回のレポートで把握した。授業目標に到達したレポートは、次回の授業で紹介して学生間の波及効果をねらった。

#### ③学生の自学自習を促すための工夫（B）

・14 回中 2 回、指定教科書を事前・事後に読んでレポートを課していた。また、教育時事と関連させて授業をすることで、学生の意欲を喚起してきた。

#### ④ 学生とのコミュニケーション(質問への対応等)（A）

<p>・ Chat 等で質問が出るような授業の工夫をしており、実際に丁寧に対応してきた。特に1・2年生は、メンタルヘルスを心配していたので、授業後に相談事にも乗っていた。</p> <p>⑤ 双方向授業への工夫 (A)</p> <p>・ 対話式の Google meet 授業によって、学生を指名したり、学生間でディスカッションの場を作ったり、学生からの好評だった。授業への集中力も高まった。</p> <p>・ 基本的には、自分自身の手応えと学生による授業評価を踏まえて、常時改善を図っている。本年度も、新型コロナ問題が学生に大きな影響を与えたので、受講者の心理状態（メンタルヘルス・経済状態）を十分に勘案しながら授業を行ってきた。新型コロナ問題の有無に関わらず、教員側は受講者の心理への配慮を基本的な姿勢として持ち続けるべきであるとする。上記③については、学科の授業との両立を図るために、授業時間内で完結する学習を想定しているため予習・復習を強く促していない。その判断は、学生の学修生活全体の負担を考慮した場合、ベターな方策と考えている。</p>
<p>5. 学生授業評価</p>
<p>① 授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。</p> <p>・ オンライン授業に関して、学生も自分自身も習熟を重ねたので、大きな問題は起こらなかった。しかし、学外から授業を実施するときには、Wifi が不安定になることもあったので、随時改善しながら実施してきた。</p> <p>①の結果はどうでしたか。</p> <p>・ 1年生からの評価は高かった。2～4年からは標準的な評価であった。</p> <p>③ ②を踏まえて次年度はどのように取組みますか。</p> <p>・ 次年度は、対面授業が基本となることから、学生の実態を十分に踏まえて授業を実施していきたい。とくに、コロナ禍で十分なケアができなかった2年・3年生は、授業内外でコミュニケーションをとって、学生理解につなげていきたい。それが、間接的に学生の能力向上にもつながると考えている。</p>
<p>6. 学生の学修成果</p>
<p>① 学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。</p> <p>・ 「成績の向上」＝「資質・能力の育成」と理解した場合、教職課程の授業では、4年次の教育実習で、専門的な力量と社会人基礎力を十分に発揮できることを目標としているので、それに向けて関係教員と事務職員と協力しながら質の高い教育活動を行っていくことに尽きる。</p> <p>② 教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価</p> <p>・ 例年、4年間履修してきた学生のほぼ全員が、教職免許を取得できていること。教育実習や介護等体験で指導教員から適切な助言をいただき、学生の成長に繋がっていること。</p> <p>・ 教員採用試験に現役合格する学生は、非常に少ない現状だが、卒業後に臨時採用教員になったOB/OGから正式採用の知らせが1年に数件届いていること。</p> <p>・ 初めて出した大学院生から教員採用試験に合格した学生を輩出できたこと。</p> <p>・ 学校の教員を選択しなくても、環境系NPOや科学教育系の企業に就職する人材を輩出でき</p>

たこと。
7. 指導力向上のための取組 (FD 研究会参加状況) ・参加している。ただし、自身の職務や研究とかけ離れた実験系固有の研修は欠席することがある。欠席した場合は、可能な限り動画を見て出席の報告をしている。
8. 今後の目標 (理念の実現に向かう今後のマイルストーン) (1) 最新の教育時事や理論を反映した質の高い授業を実施していく。 (2) 関連部局と協力して、教員採用試験の受験者と合格者を増加させたい。 (3) 社会に出て、環境教育を仕事に活躍する学生を育てたい。 (4) 出る杭プロジェクトに参加して、新たな教職課程の可能性を具現化したい。 (5) 環境教育を専門とする研究者の卵を一人でも多く育てたい。
9. 添付資料 (根拠資料) ・ 學理における授業評価、課題・テストへの回答結果、最終レポート結果、アンケート等 ・ シラバス (授業内容等) ・ キャンパスプラン (履修状況・成績評価) ・ 講義資料 (パワーポイント・レジュメ等) ・ 卒論指導学生が提出した卒業論文要旨・卒業論文 (卒論指導成果)

\*A4 4枚程度 (A4 1枚(目安 1行40文字×36行1440文字))

●FD 研修事後課題 (ピアレビューによるブラッシュアップ) の実施

<input checked="" type="radio"/> 有 <input type="radio"/> 無
--

該当を○で囲む

II 業務エフォート

活動分野	業務エフォート	備 考
1. 学生教育	55 %	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 教職課程履修学生 (4 学年分) への指導・支援</li> <li>・ 教員採用試験受験者への第 2 次試験対策 (面接・模擬授業練習)</li> <li>・ 研究室所属大学院生への研究指導・支援</li> <li>・ 研究室所属学部生への研究指導及び就活対策支援。</li> <li>・ 研究室の学外実習の準備と運営、評価</li> <li>・ 卒論指導に係る学外指導者との連絡・調整</li> <li>・ 研究室所属学生への生活指導・教育相談</li> </ul>
2. 学術研究	10 %	<p><b>査読付き論文の実績 (過去 3 年以内) 3 件</b> (論文)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. Reiko, Yeon, <u>Toshiya Kodama</u>, Won, 2019, Comparative Study on School-Based Environmental Education in Japanese and Korea, Japanese Journal of Environmental Education, 28-4, 60-67.</li> <li>2. <u>小玉敏也</u>, 2020, 動物園・水族館と学校との連携条件</li> </ol>

		<p>に係る基礎的考察,環境教育 30 (2) ,14-21.</p> <p>3. 関根瑞希・小玉敏也,長期的環境学習を経験した青年の地域観に関する研究, 日本環境教育学会関東支部年報 16 号, (3 月 19 日刊行) .</p>
3.社会貢献	10%	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2019～現在：環境省・文部科学省「持続可能な開発のための教育（ESD）」円卓会議委員。</li> <li>・2018～現在：環境省「全国ユース環境活動発表会」審査委員長</li> <li>・2015～現在：立教大学 ESD 研究所客員研究員</li> <li>・2018～現在：神奈川県立横浜旭陵高校・城山高等学校学校運営協議会委員</li> <li>・2020～現在：特定非営利法人 持続可能な開発のための教育推進会議（ESD-J）理事。</li> <li>・2020～現在：日本学術会議 ESD/SDGs カリキュラム小委員会委員</li> <li>・2021 年～現在：公益社団法人日本自然保護協会「奄美大島海域における生物多様性保全」のプロジェクトアドバイザー</li> </ul>
4.臨床活動	2%	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教員研修会講師（長野県飯田市立小中学校・長野県池田町教育委員会・埼玉県飯能市立名栗小学校）</li> </ul>
5.管理運営	20%	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教務課と連携した教職課程の管理運営（予算・シラバス・授業評価・教材備品等）</li> <li>・大学連携校との共同授業の実施</li> <li>・高大一貫校における評価委員業務</li> <li>・教職課程授業担当の非常勤講師との連絡調整及び評価。</li> <li>・教育実習及び介護等体験施設との連絡・調整</li> <li>・キャリア就職支援課と連携した教員採用試験対策講座の企画と実施、評価。</li> <li>・広報課と連携した教職課程ホームページの維持管理。</li> <li>・年度末の教職課程 OB・OG 交流会の実施</li> </ul>
6.その他	3%	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2021 年：環境省ローカル SDGs 人材育成セミナー（中部地方大会）企画・運営</li> <li>・2021 年：中華民国教育部教員研修会講師、中華民国環境教育学会講演会講師</li> </ul>

▶コメント

・近年、教職課程の方針として、専修免許を取得するために本学大学院に進学することを履修生に推奨してきた。その結果、大学院生の増加と教員採用試験合格者の現役合格に少なからず貢献できている。今後も、関係部局の意見も踏まえつつこの方針を推進していきたい。

・教職課程 OB/OG 交流会や現役の学校教員及び高大連携校との交流を通して、本学全体の教育活動にも少しずつ貢献できるようになった。例えば、2021 年度 3 月末に実施される出る杭プロジェクト(新渡戸文化学園と野生生物研究室の連携授業)は、本学教職課程 OB 教員とのパイプがなければ実施できなかった。または、博物館の骨格標本を借りて中学校の授業に生かす OG も出たり、卒業論文の制作過程で OB の勤務校の支援を得たりと、間接的に麻布大学進学への意欲を喚起している。

・授業を進めている時に、新型コロナ問題の影響を受けた新 3 年・2 年生のメンタルヘルスが気にかかることがある。全国的に見ても、大学生の心の健康に関する問題が増加していることから、教授会等の資料で、定期的にカウンセリングルームの使用状況や相談内容を掲載して、全学的な関心を高めた方が良いと思う。今後も増加傾向にあることは間違いないので、学生の学力面でのケアだけでなく、心のケアを保障する体制づくりを行なった方が、結果的に受験者数の増加にもつながると思う。